

【資料1-4-②】

四日市市における過去の風水害事例

	発生年月日／種別	被害の内容
1	1650. 9. 26 (慶安3. 9. 1) 大雨による洪水	徳川実紀に「8月29日より9月2日までの霖雨に、摂州南北中島堤くずれ、(中略)勢州四日市 神戸庄野三重鈴鹿川林の郡堤崩れ、民家人畜被害少なからず 駅々の橋梁を流し、3日より旅人の往来を得ず」と記されている。 ただし、他の地域と併せての記載であり、四日市の被害がどの程度かは不明。
2	1696. 10. 4 (元禄9. 9. 9) 大雨による洪水	三滝川が決壊し、川原町が洪水に襲われた。旧版『四日市市史』に「川原町洪水にて家屋流出者へ、金43両3分銀7匁5分拝借」とあり、その後4年に渡って代官に返済していることが記されている。
3	1728. 8. 13 (享保13. 7. 8) 台風	伊勢地方に台風が襲来し、大風雨となった。このため三滝川が氾濫し、川原町一帯が水害に見舞われた。この風水害は伊勢・伊賀両国のほか、広く東海地方一帯にも及んだことが各地の文献によってわかり、きわめて強い台風で被害が大きかったことが推定される。
4	1771. 9. 1 (天明8. 7. 22) 台風	近畿地方を襲った強い台風により大きな被害を出した。 旧版『四日市市史』に、「大降雨で三滝川の大出水となり、三滝橋は流出し、西町裏・中町裏の堤防が切れそうになった。そこで町民がこぞって防御に努めた結果、決壊を免れたが、対岸の堤防が決壊して浜一色・中島・午改新田などが浸水、砂入りし、稲作は皆無となった。」という内容が記されている。
5	1791. 9. 17 (寛政3. 8. 20) 台風	本居宣長の日記にも「元文以来の大風」と記されるほどに猛烈なものであった。この台風は伊勢湾に高潮を起こしたのを始め、東海地方一帯に甚大な被害をもたらした。 旧版『四日市市史』に、家が多数倒壊し、高波によって潮請堤が約600mにわたって決壊したことや、船が碇を切り潮請堤を越えて漁師の家まで登ってきたことが記されている。
6	1857. 6. 8～9 (安政4. 5. 17～18) 台風による洪水	近畿・東海地方を襲ったこの台風は、風よりもむしろ雨による被害を各地にもたらした。 旧版『四日市市史』に、「三滝川左岸生桑村東方及び海蔵川右岸末永村西方に於て堤防決壊し、その水氾濫の結果野田村を水中に没し、末永西横手堤を破壊して末永は勿論川原町筋一円濁水の浸すところとなり、更に浜一色南方に於て再び三滝川左岸を決壊し…」と大きな被害が記されている。
7	1860. 6. 29 (万延元. 5. 11) 台風による高潮	近畿・中部・関東一帯を襲った台風は、各地に大風水害をもたらした。この際、伊勢湾では高潮が生じ、四日市地域でも甚大な被害を受けた。 旧版『四日市市史』に、11日は朝から暴風雨で、午後3時ごろには大高潮が襲来し、海岸堤を切り、浜手の人家の半分以上が汐入りして潰滅の家が多数出たことが記されている。
8	1889. 9. 11 (明治22) 台風	11日早朝紀伊半島南端付近に上陸した台風は、午後にかけて紀伊半島を縦断し、三重県下に大きな被害をもたらした。四日市警察署長から県警本部長への報告で、「当日雨

		量は風力の強かりしに比し余り多からず、暴列風のため海潮怒濤を生じ海岸の被害夥し、（中略）高砂町及び波止場は実に目も当て難き程の惨状を極め、船舶の破損流出多数有り」と被害の状況が報告されている。また、楠吉崎から北へ海岸堤防2,700間が総崩れとなり海水が浸水、吉崎、小倉新田、北五味塚では稲が腐り、7年間免訴となった。
9	1896. 8. 30 / 9. 11 (明治29) 台風	わずか10日余りの間に2つの台風がこの地方を襲っており、被害を大きくした。初めの台風では塩浜村の海岸堤防が激浪のため決壊、2回目の台風では河原田村の鈴鹿川、内部川の合流点大門が大破したことにより、浸水が5日間に及んだこと、水稻の被害が特に甚だしかったとが記録されている。
10	1934. 9. 21 (昭和9) 室戸台風	近畿地方を襲ったこの台風は、高知県室戸岬測候所における観測で、911.9hPaという当時世界の観測史上最低気圧を記録した猛烈な勢いを持った台風であった。 近畿地方での被害は甚大で、四日市でも若干の被害があったが、雨よりも強風による被害が主体であった。
11	1938. 8. 2 (昭和13) 集中豪雨	発達した低気圧が西日本付近に停滞し、これに伴って各地で集中豪雨による甚大な被害が出た。 三滝川が堀木町で約100mにわたって決壊。奔流が市街地に押し寄せ、浸水家屋は約7,800戸に達した。三滝川の明治橋も流失、大矢知村で朝明川堤防決壊、小山田村では内部川堤防決壊、楠村では鈴鹿川決壊し死者2名など、被害は広い範囲に及んだ。
12	1950. 9. 3 (昭和25) ジェーン台風	室戸岬付近に上陸し、神戸から若狭湾に抜けた。四日市では塩浜地区の埋立地2万坪が水浸しとなり、第一工業製薬では増設中の工場が中波した。このほか、市域全般にわたって塀の倒壊が続出した。
13	1951. 10. 15 (昭和26) ルース台風	14日夜に南九州に上陸した後、15日にかけて四国・中国・近畿を横断し、各地に大きな被害をもたらした。四日市地域では、折からの降雨と高潮のため、富田・富洲原・羽津・浜田・塩浜・日永など、主として沿岸部で水害が発生し、死者1名、流出家屋1戸、床上浸水239戸、床下浸水1,190戸という被害が生じた。
14	1952. 6. 24 (昭和27) ダイナ台風	紀伊半島南部に上陸した後、伊勢湾から中部地方南部を横断し、関東地方で太平洋に抜けた。四日市地域では総雨量200mmを超える雨が降ったため、富田地区を中心に浸水家屋は床上272戸、床下3,245戸に達した。また、羽津米洗川の堤防が決壊、橋が流出したほか、内部川の内部橋・海蔵川の朝日橋・三滝川の大正橋も流出した。
15	1953. 8. 15 (昭和28) 集中豪雨	京都府南部と三重県伊賀地方に前線性の集中豪雨が生じ、四日市地域でも総雨量が200mmを超えたためかなりの被害が発生した。浸水家屋は、富田地区では床上743戸、床下630戸で、そのほか床下は富洲原地区で350戸、塩浜地区で100戸、常磐地区で50戸などとなっている。また、三滝川は大増水で、堤防頂部まで20cmを残すばかりとなった。
16	1953. 9. 25 (昭和28) 台風13号	潮岬付近に上陸し、鳥羽付近から伊勢湾を経て本州を縦断して北東へ進んだこの台風は、上陸時930hPaという猛烈に強い台風で、台風の通過時が伊勢湾の満潮時と重なったために被害が広がった。 四日市では床上浸水7,064戸、家屋の全半壊流出合わせて533戸、死者2人、重軽傷者1,273人に達した。罹災者総

		数は60,636人に上り、総人口の46%におよんだ。 楠地区では海岸堤防が20箇所2000mの決潰。地区の半分の海岸近くの水田が浸水。
17	1959. 9. 26 (昭和34) 伊勢湾台風	潮岬付近に上陸し紀伊半島を縦断したこの台風は、上陸時929.5hPa、風速25m/s以上の暴風域が東海地方から四国東部まで入るといって大型で猛烈に強い台風であった。また台風通過時が伊勢湾の満潮時と重なったため、潮位が高くなり、甚大な高潮被害が発生した。 四日市では富田・富洲原地区を中心に、死者115人、家屋の全半壊合わせて3,695戸、床上浸水15,125戸、床下浸水 3,064戸という未曾有の被害を出した。
18	1961. 6. 25～27 (昭和36) 梅雨前線豪雨	梅雨前線の活動が活発化に伴う集中豪雨が近畿・東海地方で起こり、四日市でも25日の降り始めから27日の夕刻までに392mmという大量の雨が降った。橋の流出38、河川の損壊172カ所、壊れた道路190カ所、水をかぶった田畑3,000ha、農地の流出埋没220haなど、土木・農業関係に大きな被害をもたらした。
19	1961. 9. 16 (昭和36) 第2室戸台風	1934年(昭和9年)の室戸台風とよく似たコースを取った大型で強い台風であったが、伊勢湾台風の経験が教訓として生かされ、強い勢力の割には比較的被害は少なかった。 四日市の総雨量は150mmで、稲葉町で12戸が床下浸水したほか、諏訪新道近鉄四日市駅前一帯でも約220戸が床下浸水した。
20	1971. 8. 30 (昭和46) 台風23号	鹿児島に上陸した後、四国から紀伊半島を横断して太平洋岸を抜けた台風で、四日市では総雨量が210mmに達し、富田・富洲原を中心に床上浸水326戸、床下浸水3,398戸の被害を出した。また、朝明川が下野地区で右岸が100mにわたって決壊したほか、鹿化川・天白川などでも氾濫し、橋の流出などの被害が発生した。
21	1971. 9. 26 (昭和46) 台風29号	紀伊半島南部に上陸し、東海から関東に抜けた台風で、弱い小型の台風であったが、北勢地方に多量の雨をもたらした。天白川が数カ所にわたって決壊したため、道路が川と化し、国道1号の中央緑地前では腰まで水に漬かった。被害状況は床上浸水901戸、床下浸水6,920戸、道路損壊166カ所などで、被害地区は市内全域に及んだ。
22	1972. 9. 16 (昭和47) 台風20号	紀伊半島南部に上陸し、三重県を縦断して富山湾に抜けた台風で、伊勢湾台風とよく似たコースを取っており、強風による被害が大きかった。四日市では高潮も伴って、海岸沿いを中心に床上浸水438戸、床下浸水1,569戸などの被害が出た。富洲原の名四国道防潮堤に、押し流された外国船など3隻が激突して道路護岸を壊し、天カ須賀一帯に海水が浸水した。
23	1974. 7. 25 (昭和49) 集中豪雨	梅雨末期の集中豪雨で、四日市では降り始めてからの総雨量が304.5mm、朝6時からの1時間雨量は71.5mmを記録した。このため内部川・鹿化川・天白川など多くの中小河川が決壊・氾濫し、死者2人、負傷者7人、床上浸水6,380戸、床下浸水10,713戸という、伊勢湾台風以来の大被害が発生した。日永の国道1号では2mも水が漬かったほか、内堀町では1階屋根近くまで濁流が押し寄せて一時まったく孤立するほどであった。被害額の見積りは総額で99億円。

24	1976. 9. 10～13 (昭和51) 長雨・台風17号	台風17号が10日から12日にかけて九州南方付近に停滞する一方、北から南下した前線が9日から13日にかけて本州付近をゆっくりと通過したため、東海地方が大雨に見舞われた。四日市でも富田・富洲原を中心に水に漬かり、被害状況は床上浸水591戸、床下浸水3,207戸となった。この大雨で、長良川の堤防が決壊している。
25	1979. 9. 24 (昭和54) 集中豪雨	24日夕刻から雷を伴う激しい雨が北勢地方を襲った。この豪雨は、停滞前線のゆっくりとした南下により生じたもので、18時から19時までの1時間に中消防署で118mm、北消防署で105mmと記録的な豪雨であった。これにより、富田・富洲原を中心に床上浸水227戸、床下浸水4,903戸の被害が発生した。
26	1983. 8. 21 (昭和58) 局地的集中豪雨	南東の湿った風が鈴鹿山脈の雲母峰にぶつかって雷雲を作り、雲母峰を中心とする半径10km以内の範囲に局地的な雨を降らせた。降り始めからの降水量は雲母峰で425mm、宮妻町で328mmという豪雨で、水沢地区を中心に床下浸水41戸、田畑の流出埋没2ha、そのほか河川の決壊、橋の流出などの被害を出した。この豪雨でハイカーが一時宮妻溪に閉じ込められた。
27	2000. 9. 11 (平成12) 集中豪雨	平成12年9月11日から12日にかけて、愛知、三重、岐阜県などの東海地方を中心に記録的な大雨となった（通称：東海豪雨）。 本州上の前線に台風14号からの暖かい湿った空気が継続的に流入したため、長時間にわたって雷雲が発生・発達した。このため、市内北部および中部の臨海部において浸水等の被害が出た。 北消防署における連続雨量は575mm、時間最大雨量は120.5mm（9月11日15：30～16：30）。死者1名、負傷者1名、床上浸水178戸、床下浸水1,975戸
28	2012. 9. 30 (平成24) 台風17号	台風17号は、29日には沖縄本島を通過、那覇市で午後1時23分に最大瞬間風速61.2メートルを観測するなど猛威を奮い、30日には速度を早めながら本州の南の太平洋上を北東に進んで和歌山県潮岬、三重県志摩半島をかすめた後、午後7時頃に愛知県東部へ上陸した。上陸時の勢力は中心の気圧975hPa、中心付近の最大風速35m、最大瞬間風速50m。 1時間雨量四日市市：76.0mm（9月30日17時37分まで） 床上浸水65戸、床下浸水399棟
29	2017. 1. 14～18 (平成29) 大雪 (市内全域)	1月13日の夜から16日の夜にかけて、日本付近には強い寒気が流れこみ、冬型の気圧配置が強まった。 このため三重県では14日の未明から北部の山地で雪が降り始め、16日にかけては北部や伊賀の広い範囲で大雪となった。 14日0時から16日23時までの最深積雪は、四日市市塩浜で17cmであったが、50cm以上の地域も見受けられ、観測場所の見直しなど、雪害対応を見直す契機となった。 14日（土）～18日（水）の積雪起因の救急出動は、114件。

30	2018. 9. 4 (平成30) 台風21号	三重県では平成30年 9 月 3 日昼過ぎから雨が降り、 5 日にかけて大雨や暴風となった。 四日市において、 9 月 4 日14時 4 分に最大瞬間風速28.7m/sを観測し、市内全域において暴風による被害が発生した（屋根瓦の落下や飛散多数、倒木133本、学校・スポーツ施設のフェンス等の破損多数）。 また、強風による屋根からの転落や、歩行中の転倒、屋根瓦の飛散で頭部を負傷した者など人的被害も発生した。 さらに、市内一円で倒木が多数発生したことにより、広範囲で停電が発生した。 死者 1 名、負傷者 6 名、最大停電戸数55,900戸
31	2019. 9. 4 ～ 6 (令和元) 集中豪雨	三重県では 9 月 4 日から 6 日にかけて日本海に停滞前線が東西に延びており、この前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んでいた。このため大気の状態は非常に不安定になり、北部では 4 日夜から断続的に雷を伴った非常に激しい雨が降り、気象庁は 5 日 0 時50分までの 1 時間に山城で記録的短時間大雨情報として121mmを発表、その10分後には最大125mmの雨量を観測した。 床上浸水54件、床下浸水175件、住家の損壊等10件、車両水没 6 台
32	2023. 1. 25 (令和5) 大雪 (市内全域)	令和 5 年 1 月24日から25日にかけて、冬型の気圧配置が強まり、強い寒気の影響で鈴鹿山脈沿いや紀伊山地沿いで大雪となった。 市内では中央分署で最大29cmの積雪を観測するとともに、過去最低気温となるマイナス8.7度を記録した。 また、水道管の凍結破損により、市内全域で漏水・濁水が発生した。
33	2025. 9. 12～13 (令和7) 集中豪雨 (記録的短時間大雨)	9月12日から13日にかけて、南東から暖かく湿った空気が流れ込んだ影響により大気の状態が極めて不安定となり、四日市市を含む県内北部で記録的な大雨が発生した。日永地区では 1 時間降水量が123.5mmを観測し、浸水キキクルで一時「災害切迫」（警戒レベル5相当）となった。 また、中心市街地で深刻な浸水被害が発生した。 夜間の急激な状況変化を受け、迅速な被災者支援のため、災害救助法施行令第 1 条第 1 項第 4 号の適用を受けた。 床上浸水118戸、床下浸水113戸、停電約500戸

〔参考文献〕 亀山測候所編『三重県災害史』 昭和30年 5 月 1 日発行
四日市市教育会編『四日市市史』 昭和 5 年12月 1 日発行
四日市市編『四日市市史』 昭和36年 3 月31日発行
四日市市編『四日市市史・第一巻史料編自然』 平成 2 年 3 月31日発行
新編『楠町史』平成17年12月22日発行